

は氷解したものの、家に帰るのだから理髪屋さんで頭を刈って行こうと寄った床屋さんで散髪を断わられたことに、あまりにもみじめな屈辱とも言うべき対応に激怒したものだ、と述べている。

そして「自分達が出征する時は皆歓呼の声で送ってくれたのに、今は誰一人として迎えに出てくれない者はなく、ただ自分の兄弟たちのみであった。過去の栄光は空しく、惨たる兵士の帰郷であった」と。

「あれから五十有余年、青春を軍隊と言う組織の中に、一片の葉書で入隊し、苦しい戦争と言う悲惨な生活を想い出す時、今日の平和の尊さが二十一世紀を迎えた今後も続いて貰いたいと念じています」と、この長い「青春を捧げた軍隊生活の思い出」の記録を結んでいる。

思い出の記

私のタイ国従軍記

岐阜県 秋葉定雄

一 軍属に応募する

戦後五十数年経って、私が若い時代に軍属としてタイ国に従軍した頃の、忘れていたことを断片的に思い出しながら、綴ってみたいと思います。

私が第二次世界大戦に関わったのは、昭和十八年（一九四三）年夏のことです。私は当時十八歳、国鉄の高山機関区に勤めて三年目のことで、昭和十八年三月から機関助手として高山線の岐阜、富山間の列車に乗務していました。

夏のある日、機関区の掲示板に次のような掲示が出ていました。

軍属募集

一、人員若干名

一、南方方面

一、期間 三年

詳細は事務助役まで

とありました。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃に始まった第二次世界大戦に、若い人達は、勝つために戦争に行かなければと志願して兵隊に行く人もありました。

私が軍属を志願したのは、兵隊でなく軍属として行けば三年契約で、三年後には内地へ帰って徴兵検査を受けられると思ったからでした。そして事務助役に言われ、診療所で検査（身長、体重、眼、耳、問診）等を受けました。三日程経って事務助役から「君は眼が○・六で悪いから駄目だ」と言われましたが、再度検査して一・〇であったので事務助役に話し合格となりました。

そして、給料は「現在の月給四十四円は五十五円に昇給して留守家族に支給される。現地では戦時加算給が支給される」ということなので、軍属に行くことを決心しました。そして同じ機関区

機関士落合幾（ひろし）さん、機関助士の阪下利一さん、清水治造君と私の四人が一緒に行くことになりました。

高山を出発したのは昭和十八年十一月十五日、出発前日には父と兄と川畑の叔母さん（母の妹）とでささやかな宴を催してくれました。母は昭和十二年一月三日、私が小学五年のとき病気で亡くなっています。

出発の日の朝、家の前で町内の方に挨拶をして名古屋へ行きました。その時の服装は国鉄の制服のままに、足には巻脚絆を巻いた服装でした。

名古屋鉄道局では局主催の壮行会があり、局の楽団による軍歌の演奏などがあって士気を鼓舞してくれました。その夜、名古屋を出発、翌朝着いたのは千葉県の津田沼でした。そこから千葉の鉄道連隊に入隊し軍服に着替えました。与えられた服は夏服一着で少し寒かった思い出があります。鉄道の制服は後日、名古屋鉄道局に送られ、父が

機関区へ返納したそうです。

宿舎は津軽倉庫というところで、倉庫内には鉄道線路（モーターカーで貨車を引くもの。軽便鉄道）が敷いてあり、線路の外側にマットを並べ、毛布が一人三枚宛配給されました。それだけで寝るのです。初めのうちは一枚を二つに折って敷き、二枚を着て寝ていましたが、とても寒くて寝られないので、友達二人と話し合って、三人分の毛布を三枚敷き、六枚を着て寝るようにしました。また寝る位置を真中、右側、左側と毎晩交代で寝ました。

翌日から三八式騎兵銃を担いで軍事教練をしました。入隊当初は麦飯でしたが、しばらくするとご飯に小豆が入ってきました。これは何か祝事でもあったのかと話し合っていました。毎日小豆飯となり、次は大豆飯となり、これは代用食だと分かりました。

炊事当番が週一回程廻ってきました。炊事場からご飯とおかずの食缶を受け取り、隊員の飯盒に

盛り付け、食後、食缶を炊事場へ持って行き、藁縄をまるめた「たわし」で水洗いして炊事場の兵隊に検査してもらって合格となると食器棚に納めて帰るのです。食缶はご飯の食缶とおかずの食缶があります。ご飯の食缶のときはすぐ洗え、合格するのですが、おかずの食缶は魚や肉の油分が多い時があり、たわしで何度水洗いしてもきれいにならないので中々合格することができませんでした。私は食事がすんだら素早くご飯の食缶を取って炊事場へ行き、水洗いして合格となり早く帰ることができました。

入隊してしばらくしたら、南方方面へ行くというので、伝染病の予防注射をすることになり、三種混合と四種混合を左右の腕に、一日おきに交互に一週間程行いました。隊員の中には発熱する人もありました。今思えば、当時予防注射をしたお陰で伝染病にもかからず、マラリアも一回の発熱だけですんだのだと思います。

十二月上旬、部隊創立記念日ということで家族との面会が許され、早速家へ連絡して父に来てもらいました。連隊では霧島のぼる等の芸能人が来て、歌や漫才等のアトラクションをやって賑やかなことでした。父が持って来てくれた重箱には、川畑のおばさんが作ってくれた寿司や卵焼き、おはぎ等おいしいものばかりで嬉しく食べました。

ある日、実弾射撃をすることになりました。連隊の射撃場へ行って実弾五発を貰って立ち撃で一発、ひざ撃ちで二発と、三種類の撃ち方で五発撃ちました。撃ったときの反動が大きいのでびっくりしました。結果は一発も当たりませんでした。実弾を撃ったのはこれ一回限りでした。

近日中に出発といわれていましたが、輸送船の都合でいつになるのか、どこへ行くのか分からないという話が流れていたもので、十二月中旬、外出のできる将校待遇の稲沢の山田さんに頼んで、また父に面会に来てもらいました。その時も、川畑のおばさんの手料理が沢山入っており、大変おい

しく嬉しかったものです。

輸送船が昭和十九年一月上旬になるということが決まったのか、十二月二十八日から一月五日まで外泊が許可され、家に帰って父と兄と男ばかりの三人家族で正月を迎え、年末年始をゆっくり過ごすことができました。

二 タイ国へ到着する

一月八日夜、部隊は門司に向けて軍用列車で出発しました。門司には翌朝に着き、輸送船に乗りました。船は五、〇〇〇トン級の貨物船で、船内の壁には石炭の粉がいっぱい付いていました。

垂木をわたし、裏板を並べた二段のもので、畳二枚に十一人が頭と足と交互にして寝るといふ窮屈なものでした。しかし、半数は甲板に出て対潜監視ということになっていたのですが、一月上旬のことで、甲板は寒くて辛抱ができません、皆が船室に戻ってくると混み合って、なかなか寝られませんでした。

高雄（台湾）へ入る手前で大時化に遭い、船の舵が故障したのか、一晚同じ所をぐるぐる回ってようやく高雄の港に入り、ここで修理することになりました。

船が修理中には船側に現住民のボートがやってきて、「バナナ五銭、バナナ五銭」と売りにきます。そこで飯盒に五銭を入れて紐でつるしてやると、金をとってバナナを入れてくれるのですが、引き上げてみると生バナナではなく干しバナナでした。一杯くわされたと思っただけですが、その頃はボートはもう逃げてその辺にはいませんでした。

私達と一緒に船団を組んで来た船は水、食糧等を積んで先に出港して行っただけですが、港を出た途端にアメリカ軍の爆撃と魚雷攻撃を受けて一隻のこらず沈没してしまいました。私の乗った船も一緒に出ていたら沈んでしまうところでした。私の第一回目の命拾いでした。

船の修理に手間取って、次に来た船団と、船団

を組み直しての出港となりました。高雄までは日本の飛行機が護衛してくれましたが、高雄からは護衛の飛行機はありません。肝も縮む毎日でした。

香港を過ぎると気候が暑くなつて、船室には居られなくなり、皆が甲板に出るようになり、畳二枚でも楽に寝られるようになりました。そして、無事フランス領インドシナのサイゴンへ着きました。ここでようやく派遣先がタイ国だと分かりました。

上陸の前に部隊長から「下痢または腹の調子の悪い者はいないか、赤痢の疑いがあるなら申告するように」と言われ「その者はすぐ入院だ」と知らされました。私は下痢気味でしたが、今ここで入院したら部隊と離れてしまい大変だと思い、内地を出発する際に支給されたクレオソート丸と、父がくれた「征露丸」を大目に服用して、やっと下痢がとまり体の調子もよくなったので、部隊と一緒に行くことができました。

三 タイ派遣岡第五八二一部隊へ

サイゴンで二日間休養し、それからプノンペンまではポンポン船で、プノンペンからは貨物列車でバンコクを経由してタイ国のカンチョンブリー（以下カンブリーという）というところへ着きました。二月下旬でくわしい日付は記憶していません。そこが部隊本部のあるところで、部隊の名前は「泰派遣五八二一部隊」です。私はその中の「第十特設鉄道運輸隊」の所属でした。

私達の部隊の任務は泰緬鉄道（タイ国のノン普拉ドックからビルマのタンビザヤまで）を運営することでした。それはインドのインパールを占領するための「インパール作戦」で、兵隊、武器、弾薬、食糧等を輸送するために鉄道第九連隊（鉄九）が捕虜を使って短期間に建設したものを、鉄九と交代して運営することでした。アメリカ映画「戦場にかける橋」というのはその建設時のことを映画にしたものです。その映画の主題歌「クワイ河マーチ」は映画音楽として有名です。

部隊の宿舎では若い機関助手ばかり十五人程集めて、部隊副官が教官となってディーゼルエンジンと揚水ポンプの講習があり、約一カ月習いました。泰緬鉄道の機関区及び駅間にある給水場で使うものでした。

私達の宿舎の隣が捕虜の宿舎になっており、夕方ともなるとどちらからともなく宿舎の外に集まり、阪下さんはハーモニカで、捕虜はギターで外国の民謡「峠の我が家」「旅愁」等を合奏し、みんなで歌って楽しんでいました。ところが部隊副官が飛んできて「捕虜と交際してはならない」と厳しく言われ、捕虜との音楽を通しての楽しいひとはオジャンになりました。

そして昭和十九年四月、それぞれ任地が決まりました。落合さんはキンサイヨーク機関区へ、清水君はビルマへ、阪下さんと私はニーク機関区へ行くことになりました。

四 ニーケ機関区の炊事当番

ニーケ機関区はビルマとの国境近くのジャングルの中の小さな機関区でした。敦賀機関区出身の区長以下、九州、関西、中部、関東の出身者で総勢三十七人でした。

区長は、機関助手二人では汽車の運転が運用できないので、機関助手は労働者数人を使うこととして、阪下さんと私に「炊事当番をやってくれ」と言われました。炊事せよ、と言われても全然経験のない二人なのでどうしたものかと思っていたところ、区長が「同じ敦賀出身の熊谷という機関士がいるから、その人に習えば料理のことは多少分かるだろう。ぜひ熊谷さんに習いなさい」というので、熊谷さんに一週間程ご飯の炊き方から味噌汁の作り方等を教えてもらいました。

赴任当日の夕食には鶏の配給があったので、つぶして鶏の汁を作って出しました。熊谷さんは鶏をつぶす時に、ササミと手羽のよいところを取って置いたから「すき焼き」にしようと言って一緒

に食べました。「そんなことをしても良いのですか」と聞いたところ「これは炊事当番の役得だから良いのだ」と教えてくれました。

熊谷さんは兵隊に行ったことのある人で、軍隊のことをよく知っているのだと思いました。下働きにはジャワから来た労働者で、十五、六歳の男の子二人を、「太郎」「次郎」と名をつけて使い、一カ月程して、私達は朝寝ができ、朝起きて味噌汁の味加減をみるだけになりました。

食事の材料は粗末なもので、野菜は内地から来た大根の葉の乾燥したもの、南瓜、さつまいも、魚のメンタイの干したもの、肉は内地から来た一斗缶に入った豚の塩漬でした。生魚や生肉は配給もなく、卵はアヒルの卵で、鶏卵よりは大きい旨味はあまりうまくありませんでした。

米はタイ産米で、餅米を三割混ぜて炊きました。そうすると内地米のようなご飯になりおいしく食べることができました。三十七人の隊員の中には九州、関西、中部、関東と様々な所の出身で嗜好

が全然違うので、その味付けに苦労しました。

ある日、鶏と野菜とを入れて「味ご飯」を炊いて出したところ、各宿舎からご飯が足りないとい、ボーイが食缶を持って来たので、余った味ご飯のこげでもよいからと言ってきたので、全部きれいに配給してしまいました。よほどおいしかったのでしよう。

昭和十九年六月下旬、区長から「豚が支給されるから部隊本部へ受け取りに行つてこい」と言われ部隊本部へ行きました。

本部の炊事部から豚五頭を受け取り、部隊の労務者を使って籠に入れて貨車に積んで帰りました。帰るまでに豚小屋を作ってもらおうよう頼んで行ったのですが、作つてないので取り敢えず鶏小屋へ入れておきました。ひと晩たつたら、何と五頭のうち三頭が逃げてしまったのです。

区長、助役に相談したら、餅をまいて寄つてきたところを殺してしまおうということになり、鶏

小屋の周辺に餅をまき豚が来るのを待っていると翌日豚が餌を食べにやってきました。当機関区には昭和十六年以來の軍属でマレー半島等を廻ってきた九州出身者で、員数外の余分な弾をもつていたのがいて、その銃で射殺しました。

料理することになつてジャワ人は宗教の関係で食べないということで、他の労務者数人に頼んで料理してもらいました。

まず、頭を切り取つて労務者にくれてやります。足はニーケ周辺の駅へ送つてやり、労務者には臓物と肉を少しやり、あとは当区員三十七人で食べることになりました。

二百キロ程ある大きな豚です。とてもちよつとやそつとでは食べきれません。毎日毎日豚料理ばかりです。朝は豚汁、昼は照り焼、夕食はトンカツと続きました。私の顔は豚の脂でニキビがひどくなり、朝顔を洗うと顔が痛くなりました。残りの豚二頭は、私の帯剣を使つて労務者に処理させ料理させました。

昭和十九年六月、機関士の昇格試験があり、阪下さんと二人で受験しました。区長と助役立会いの上での筆記試験でした。その答案用紙は部隊本部へ送られ、四日程して区長に連絡があり、二人共合格したことで阪下さんと喜び合いました。しかし仕事は相変わらず炊事当番でした。

昭和十九年八月、阪下さんがマラリアにかかり、熱がひどく、すぐ後方の病院へ転送されました。その後、阪下さんとは引き揚げる時バンコクの収容所で一緒になるまで、どこに勤務していたのか分かりませんでした。その後は私一人と労務者の太郎と次郎とで炊事をしていました。しばらくすると区長から「果物の支給があるから部隊本部へ受け取りに行つてこい」と言われ、パイナップル、マンゴ、マンゴスチン、バナナ、ドリアン等を直径一メートル程の竹籠五個に入れ、貨車に積んで帰りました。それを周辺の駅や労務者に分配して食べました。それで果物はしばらくの間充分に食

べることができました。

九月に入って水牛一頭が貨車で送られてきました。料理方法がわからないので労務者に聞いたところ、インド人は宗教の関係で牛は聖牛として食べないし取り扱わないとのこと、インド人以外の労務者数人に料理してもらいました。

まず、水牛の四ツ足を縛って、頭を切断して労務者にやりました。首から出る血液をバケツに取って持つて行くので、何にするのかと聞いたら、マラリアの薬だから皆で分けて飲むのだと言いました。

軍の命令で、皮はきれいに剥いで部隊本部へ返納せよとのことでした。皮はなめして兵器に使うためとのことでした。隊員の中から牛タンはうまくいからるように言ったので、こちらで取って、臓物は労務者にくれてやりました。そして肉の一部を周辺の駅へ配り、労務者にもやりました。

水牛の肉は堅く、まるで地下足袋の底を噛んでいるようでとても噛み切れませんでした。牛タン

はうまいという話でしたが、あまりうまくありませんでした。それでも何とか調理して隊員に出しました。

五 空 襲

ニーケ機関区に赴任して、阪下さんと炊事当番をするようになってしばらくたった時、夕食後、午後八時頃、縁台で夕涼みをしていたところ「敵機が来るぞ」という電話があり、あわてて鉄カブトをかぶり糧秣倉庫に入り、米袋をいくつも身体の上に乗せて弾丸の当たらないようにしていました。やがて敵機が三機来て機銃掃射を始めました。糧秣倉庫付近も襲撃されました。バリバリと凄く大きな音がして、生きた心地がありませんでした。敵機は三回程旋回して機銃掃射をすると飛び去って行きました。その時「あつ、生きていたんだ」とホッとしました。起き上がって米袋をよけて周りを見ると、側の米袋に弾丸が当たって破れ、米が外へ流れ出ていました。もう少しのところ

私の体に当たっていたら死ぬか負傷するところでした。これが第二回目の命拾いでした。

飛行機はアメリカのグラマン戦闘機だったとのこと、その後、多い時は週三、四回、少ない時でも二回は来襲しました。グラマンの他にロッキードP 38もやって来て、機銃掃射をしてきました。しばらくすると、山と山との間からエンジンを止めてくる時がありました。労務者は空襲の連絡があると、すぐジャングルの中へ逃げ難を逃れていました。私達も後からは、ジャングルの中へ逃げるようにしました。それでも空襲の度に命の縮む思いでした。

六 マラリアにかかる

九月下旬に入って、糧秣をもらいに労務者六人を連れて兵站部隊へ行き、米、味噌、醤油、砂糖等を受け取って帰りました。その時、ひどく汗をかいたのでマンデー（水浴）をしましたが、その時は寒気もしないので大したことはないと思って

いました。

夜になって熱が出て大変苦しく、うなされました。翌日も翌々日も熱が下がらず、うなされ通しました。他の隊員が交代で川から水を汲んできて頭を冷してくれましたが中々熱は下がりませんでした。マラリアにかかったのです。マラリアの薬「キニーネ」を貰って服用しました。それでも中々熱が下がりませんでした。その時、内地にいる父や兄や川畑のおばさんのことを思い出しました。このまま死んでしまうのではないかとも思いました。

マラリア三日熱とは、三日間発熱すると熱が三日程下がりますがまた上がるという繰り返しで、熱帯熱とは一週間以上熱が下がらないのです。私のかかったのは熱帯熱で一番悪性のものでした。

他の隊員が頭を水で冷しながら「秋葉君、しっかりしろ、頑張れ」と励ましてくれましたが私はうなされていたので「ウン、ウン」と生返事するだけでした。ご飯を食べないと体がもたないからと

ご飯をすすめてくれたので、ご飯と味噌汁を一杯ずつ食べていました。

一週間経って熱が下がり、気分も楽になって少し動けるようになったので、歩いて地区の診療所へ行つて診察してもらったところ、熱が三九度五分ありました。一番熱の高いときは四〇度から四一度ぐらいあったのではないのでしょうか。発熱するということはこんなに体がえらいものかと思えました。食事の事を聞かれたので「ご飯を茶碗一杯食べてます」と言ったら軍医が「そんな無茶なこととしては駄目だ、今日からお粥にしろさい」と言われました。しかし、私はお粥にしないでご飯を食べていたので、体がもったのだと思えました。

それで診療所から帰ってお粥を作って貰って食べました。すぐ後方の病院へということで、カンブリーの部隊本部で軍医に診てもらったが、まだ熱が下がっていないだったので、バンコクの陸軍病院に移送されました。

その時、病院の兵器庫へ帯剣を納めたのですが、兵器係が剣を抜いて検査することがなかったため、豚の血糊のついて錆びた剣を無事納めることができませんでした。もしその時、錆びた剣を見られたら、天皇陛下から預かった兵器だと大変叱られたと思います。

病院はタイ国の女学校を貸し切りで借りたものです。バンコクの病院へ来てからキニーネの注射をしてもらったので熱も下がり、体も大変楽になり、再度熱が出ることはありませんでした。バンコクの陸軍病院に来てよかったと思いました。

しばらく入浴や水浴をしていなかったため、手の甲にタムシができて治療することになりました。タムシの治療とは薄めたクレゾール石鹼液をガーゼに浸して患部を洗うのです。午前九時になると医務室前にクレゾール石鹼液とガーゼが出されるので、九時前に行つて洗うのです。

少し遅れて行くと、先にビルマから後送された

患者が熱帯潰瘍の治療にきて、クレゾール液で洗うとタムシの治療どころか熱帯潰瘍が移つて、私の体に熱帯潰瘍ができてしまいました。それが両足、胸、背中、首等体中に広がり、夜は化膿したところがうずいて寝られず、病衣は一日で汚れてしまい、膿のついた病衣が膿のないところにつくと、そこが新しく潰瘍になる有様でした。

一週間に二回の病衣の交換では追いつかず、体中が潰瘍で膿だらけになり、困つてしまいました。病院では週一回、タバコや甘味品が支給されるので、それを病衣の交換に来るタイの洗濯女に、毎日少しずつ与えて特別に毎日病衣を交換してもらいました。

食事の味噌汁に油揚げなどが入っているのを食べると、その晩はうずいて寝られず、また、バターを食べても寝られず、困つてしまい、炊事場へ行ってゴマ塩を貰つてきてご飯にかけて食べる始末でした。

そんな時、衛生軍曹が「町に値段は高いがよい

薬を売っているが使ってみるか」と言われました。私の月給は兵隊（上等兵で十八バーツ）より給料がよく、一カ月五十バーツを貰っていたので、多少の金を持っていました。それで衛生軍曹に頼んでその薬を買って来て貰いました。

その薬は内服薬です。その薬を一週間程服用して、クレゾール石鹼液と併せて治療を行ったところ、全治に近くなり、二、三カ所の潰瘍は残りましたが、ほとんど治ったようでした。しかし薬が無くなって、二、三カ所の潰瘍からぶり返して、元のように沢山になり、完治することができませんでした。

この様子を見て、衛生軍曹が考えて「この薬ならどうだろう」と新しい薬を買ってきてくれました。その薬は粉薬で、化膿した潰瘍の穴へガーゼを入れて膿を拭き取ってから穴へ粉薬を少しずつ入れ、肉を盛り上げて治療する方法でした。一日数カ所ずつ根気良く治療したところ、約三カ月で完治することができました。

その頃、インドやビルマからの患者が増えて、狭くなったので、講堂を開放し、軽症の患者三十人程が雑魚寝することになりました。その時、ビルマから来た兵隊さんと、私の近くにいた人が、名古屋の松坂屋デパートの話をしきりにする方がいたので「出身はどこですか」と聞いたところ「岐阜県吉城郡国府村広瀬の出身で田中です」と言われました。「私は高山の出身です」と言ったら、大変懐かしく思われ、私も飛驒の人と会えて懐かしく思いました。

その後、田中さんは病気が全快して原隊復帰のためビルマに行かれました。田中さんは終戦後、タイへ入り、泰緬鉄道に泥棒が出没して機関車の部品や電線等を盗まれるので沿線警備隊となって勤務し、ワンヤイで再会し、お互いに無事を喜び合い、同じ復員船で日本へ帰りました。

バンコクの空襲もはげしく、週二、三回の爆撃や機銃掃射がありました。主に港湾付近の軍事施設のようなので。あるとき、生ゴムの倉庫が爆撃さ

れて三日程燃えておりました。B 29 の爆撃に対し高射砲隊が射撃するのですが、飛行機の下で弾丸が炸裂するので効果は全然ありませんでした。

港より離れたこの病院には赤十字の旗が屋根に張ってあるのか爆撃にあうことはありませんでした。病院のそばに通信隊があり、連合軍の発する電波、放送を傍受しているのですが、時々大正、昭和初期の流行歌を流したり、降伏を勧告したりしていました。

私は熱帯潰瘍が大分よくなって歩けるようになったので、通信隊へ遊びに行つて連合軍の発する流行歌を聞かせてもらつて楽しんでいました。

退院する際に兵器庫で自分のゴボー剣を受け取ることになったのですが、自分の兵器の番号を忘れてしまったので適当な番号を言ったところ、偶然にそれに近い番号のゴボー剣があり、ピカピカの剣をもらつて退院しました。

結局、マラリアよりも熱帯潰瘍の方が長い入院になり、病院の周囲の田圃から米が二回採れる程

の八カ月の入院でした。

これでマラリアと熱帯潰瘍による三回目の命拾いをしたわけです。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十八年、十八歳の時から国鉄高山機関区に勤務、その職歴もあつて鉄道部隊の軍属を志願して合格、同年十一月十五日、郷土を出発、内地での訓練を経て、昭和十九年一月八日、泰にあつた「泰派遣五八二部隊」に派遣された。この部隊名は第十特設鉄道運輸隊であつた。

この鉄道運輸隊は、泰緬鉄道を運営することで、既に鉄道第九連隊（鉄九）が建設した鉄道の運営を鉄九と交代して運営することを任務としていた。

「鉄九」は昭和十六年九月、津田沼で編成され、北部仏印に派遣された鉄道連隊である。また鉄道部隊の多くは、国鉄職員の身分のまま軍

属として召集し、鉄道兵の指揮官ほかを付けた部隊が多い。

執筆者が配属された特設鉄道運輸隊や、同工作隊、同橋梁隊、同工務隊、同作業隊と言われる部隊は、主に国鉄の軍属部隊であった。これらの部隊の活躍は、歩兵部隊の進攻後、すぐに鉄道が動くほどの活躍を各地で行ったといわれる。

「鉄九」は泰国上陸作戦に海上から加わり、一部はカンボジアから国境を突破して泰国に入り、泰緬鉄道の建設に入った。この泰緬鉄道の建設は、第二鉄道監指揮の下に「鉄九」は泰側から、「鉄五」は緬甸側から、歩兵、工兵、その他の部隊一万四千人、それに捕虜約五万人、現地労働者約九万人という陣容で建設にあたり、昭和十七年七月より建設開始、同十八年十月までに建設を完了している。

しかし、その現地の給与及び衛生状態は地域

的、気候的な環境としては頗る不良で、千古人跡未踏の密林地帯を形成するケオノイ河を除いて利用すべき交通路は皆無であり、鉄道建設時には並行して自動車道を構築して糧秣、資材の輸送に当たり、雨季には舟艇をもって河の遡航輸送に頼ったものの、諸建設作業の原動力となる糧秣の確保には、輸送力の過小と共に、主食や精肉、生鮮野菜の不足によって、極めて貧困、困難な状況を呈したといわれる。

また執筆者はこの鉄道のニーク機関区に赴任して鉄道の運営に当たっているが、鉄道沿線の部落は泰国側にはターカヌン、ニークがあり、緬甸側にはアナクインの小部落があるのみで、他の地域は前記のごとき密林地帯であって、マラリア蚊の棲息地で、ほとんどの人員が罹患した。このマラリア対策は当初より実施しており、罹患率に対して死亡率は低位にあったというが、ほかに一部に黒水熱を起こした者もあった。

執筆者の所属した第十特設鉄道運輸隊は、建

設が完了した泰緬鐵道を「鉄九」と共に、あるいは「鉄九」と交代して、この鐵道の運営に当たった部隊であった。しかし、前記のような現地の環境状況から脱することはできず、執筆者の記録にもあるような厳しい状況を示していた。特にマラリア、各種の風土病、皮膚病など、これらの病魔に犯された労苦を体験した。その様子は、本人の実感として、

『結局、マラリアよりも熱帯潰瘍の方が長い入院になり、病院の周囲の田圃から米が二回採れる程の八カ月の入院でした』と、記録を終えている。